

(国立国会図書館デジタルコレクション・同サーチ登録)

増改版

# 遠友夜学校の遺産はどう伝承されたか

— 新渡戸稲造の夢を未来へつなく年譜 —

編集著作者 白佐俊憲 (遠友夜学校研究者)

監修発行者 正倉一文 (随筆春秋事務局長)



初版発行 2023年(令和5年)5月23日

増改版発行 2023年(令和5年)10月15日

(今後も増改訂による蓄積を予定)

印刷委託先 製本直送ドットコム

(簡易印刷希望者へ別途有料サービス提供)

### **【資料・情報提供協力の主要機関・団体】（五十音順、敬称略）**

- アジア招提（杉岡昭子）
- NTT東日本情報通信史料センター（菅直子）
- 遠友再興塾・札幌遠友会再興塾（佐藤邦明）
- 札幌遠友塾自主夜間中学（工藤慶一）
- 札幌市教育委員会・札幌市広報部広報課ほか
- 札幌市中央図書館（レファレンスサービス）
- 新渡戸稲造と札幌遠友夜学校を考える会（三上節子）
- 新渡戸基金（藤井茂、岩手県盛岡市）
- 新渡戸記念館（Kyosokyodo、青森県十和田市）
- 平成遠友夜学校（藤田正一）
- 北海道新聞社（読者センター）
- 北海道大学大学文書館（山本美穂子）
- 北海道に夜間中学をつくる会（工藤慶一）
- 北海道立教育研究所（教育課題研究部）
- 北海道立図書館（レファレンスサービス）

### **【本書の特色】**

- 札幌市に誕生し、明治・大正・昭和の50年間存在した私塾遠友夜学校の推移と、閉校後のその伝承過程を追い続けた年譜である。新渡戸稲造夫妻が残り、学生教師と苦学生徒が生産した「美しい高貴な遺産」の行方を追った情報資料集である。
- 新渡戸稲造個人関連の資料・記録については、膨大で把握不可能であるので、範囲を広げず、北海道内と全国での功績の一部を収録している。
- 埋もれた史実の発掘、別角度からの考察、史料・資料の実証性・客観性を意識した。文献資料の出典をできるだけ詳細に明示し、ガイドブックの役割を果たすものにした。

- 遠友夜学校の閉校後の資料の取載に重点を置いたので、従来の文献とは違った内容の事柄、違った視点からの回顧情報も載せている。
- 小事項の並列を基本に、柔軟に資料・情報を収集したので、従来の書籍類では取り上げられなかった特殊な関連事項も加えている。
- 関連事項を大・中・小に分けて書き進めた従来書とは大きく異なる。原則として、小さな事項を年月日順に並べ、補足説明や前後の関係の事柄を付け加えて、小さなまとまりにして並べた時系列年表となっている。
- 諸事項が時系列に並んでいるので、事柄の関連や変化の過程を知ることができる。意外な事柄の関連性が見えてくる。
- 電子書籍の作成を主としており、加筆修正が容易にできるので、増補改訂の累積を迅速に行え、新事項を早期に盛り込める。

### 【凡例】

- 本書は「札幌遠友夜学校」の前史～後史の関連情報事項を収録している。
- 事柄の生じた年月日を最重視し、主要事項を、西暦を主に時系列（年月日順）に並べている。説明文にも原則とし西暦と和暦を丁寧に併記した。（引用文にも、原文になかった西暦または和暦を加え、原則、西暦を先に記すように統一した）
- 必要に応じて、事項ごとに簡明な補足説明・資料を加え、ある程度の独自性をもたせたことから、同じ説明が他でも出てくる。（主要な参照先を⇒で示した）
- 固有名詞・肩書・年齢等やその字体等は、その時点でのものとした。太平洋戦争終結後2、3年後を境とする以前は、旧漢字の固有名詞が使われていたので、その時の記載に合わせている。新旧の混在が随所に出てくる。年齢は満年齢とした。
- 住所の表記に漢数字を使った場合があるのは、明治時代の前半、地図の横書き表記でも漢数字が使われていたことに合わせたものである。
- 引用文は「」括弧でくくり、旧漢字・旧仮名遣いも、誤記誤字等も敢えてそのままとした。文中の「/」は、改行や1文字空白の部分であることを示す。

○元資料を参照できるように、図書名・資料名や発行先、発行年月日、ページ数等も、可能な限り書き加えた。記載のない「月・日」や「日付」は、もともと記載がないか不明かのものである。

○人名等の「氏、さん」等の一般的敬称やルビ（振り仮名）は、ごく一部を除いて省略した。

### **【編集著者紹介】白佐俊憲（しらす・としのり）**

1937年10月生まれ。北海道北竜町出身。1856年4月、北海道大学文類に入学、1960年3月、同教育学部教育学科を卒業。1957年10月～1964年3月、BBS（大兄姉）運動に参加。1960年4月～1967年3月、北海道立児童相談所（1960年4月～1962年4月、旧札幌遠友夜学校跡地に所在の北海道中央児童相談所）勤務。本書の中で記述する長野襄と知り合う。1967年4月～2006年3月、大学教師として勤務。この間、本書の中で記述する半澤洵・小塩進作と知り合う。現在、無職。

### **【監修発行者紹介】正倉一文（まさくら・いちぶん）**

1958年7月生まれ。東京都品川区出身。北海道大学文2系入学、同経済学部経済学科を卒業。製造業に就職。製鉄、機械、化学とわたり歩く。西暦2000年、男の厄年で、サラリーマン生活を断念。かねてより憧れであった文筆の道を目指す。同人誌『随筆春秋』（一般社団法人随筆春秋）が主催する文学賞（エッセイ）で賞を取ったことをきっかけに、同人の事務局員としてかかわる。2023年5月から、同事務局長に就任した。編集著者・白佐俊憲とは奇しくも先輩後輩の関係である。

### **【印刷販売委託先情報】**

製本販売業者 製本直送ドットコム : <http://www.seichoku.com/>

## 目 次

「はじめに」に代えて—新渡戸稲造校長の講話—	5
「要約」に代えて—高井竹一の作文—	10
「あとがき」に代えて—蝦名賢造の言葉—	11
1. 夜学校創設以前（～1894）	13
2. 遠友夜学校時代（1894～1944）	28
3. 閉校後模索時代（1944～1964）	83
4. 勤労青少年ホーム内記念室時代（1964～2014）	114
（札幌遠友塾自主夜間中学時代（1990～））	{147}
5. 新渡戸稲造記念公園・北海道大学内展示時代（2014～）	232
付録 社会事業活動を主にした半澤洵概略年譜	333
付記 編集著作者からの追記—本書誕生の契機と経緯—	345

### 【主要関係者の生没年・死亡年齢早見表】（五十音順）

有 島 武 郎	1878年03月04日～1923年06月09日、45歳
小 塩 進 作	1915年06月08日～1998年03月28日、82歳
高 倉 新一郎	1902年11月23日～1990年06月07日、87歳
新渡戸 稲 造	1862年09月01日～1933年10月15日、71歳
新渡戸 萬里子	1857年08月14日～1938年09月23日、81歳
半 澤 洵	1879年01月09日～1972年09月25日、93歳
宮 部 金 吾	1860年04月27日～1951年03月16日、90歳

## 「はじめに」に代えて—新渡戸稲造校長の講話—

○創設者・新渡戸稲造初代校長は、1931年（昭和6年）5月18日、前回の1909年（明治42年）6月以来22年ぶりに遠友夜学校に来て、生徒らを前に遠友夜学校開設の経緯などについての講話をした。講話の速記録が残された。それが同年11月25日発行の広報紙『遠友』（札幌遠友夜学校学期報）第9号、1ページ目に載せられた。（北海道大学大学文書館所蔵）

○新渡戸校長自らが語った貴重な言葉として、のちの人が「遠友夜学校について」著述や講話の中でふれるとき、この日の揮毫『學門より實行』とともに極めて多く引用・紹介されてきた。（これは、実は、札幌に残された奇跡の「遺言」だった）

○一般的には、新字体・新仮名遣いにし、理解しやすい間接引用の形にして断片的に紹介されるが、史料性を重視する本書は、学期報『遠友』9号掲載全文をそのまま転載した。

○「私は此の學校の校長と云ふ名があるにも拘らず平生御無沙汰して濟みません。然し御無沙汰して居ても學校の事を忘れた事はありません。然も此の學校に就て良い評判を聞く毎に甚だ嬉しく思ふ。それは自分が校長と云ふ名を持つて居るので自慢の様に聞えるがそうではない。私が校長でなくとも此の札幌にこんな學校があつて晝は働き夕方になると此處へ學問しに来る若い人が大勢ある。子供の頃は一時間でも暇があれば遊びたい、殊に仕事をする人は夕方になると疲れる。雪の深い中も雪を踏んで来る、こんな心掛けの人が大勢居られると云ふ事は私にとり何とも云はれぬ教訓であります。自分の心の弛む時でもこんな人も大勢あると思へば安閑として居られず貴下方の話聞く毎に自分の心を鞭打たれる様な気分がする事がある。

斯く只今述べた如く無沙汰しても學校を忘れた事はない。いろんな人が視察して東京に來られて遠友夜學校は實に感心であると云ふ話、卒業生の働き先で良く働く

事を聞きこんな學校を始めた事の無意義でない事を嬉しく思ひます。

學校の始めは今より四十年前私が外國から北海道に歸り米國で貰つた家内を連れて來た。私の家内の父が世話好きでいろんな人を世話し、或は家に泊め居き或は都合して困って居る人を助けるのが道樂であつた。或る時みなし兒で孤兒院に居たのを引受けて養つて居た。年は十四五で女中よりも良く取扱ひ教育された。父も母も家も無いそれで父の養女の様に居た。年は取つても嫁かず家に残り家事を手傳ひ六十餘歳迄長らへて居たが遂になくなつた。遺言に小使ひを蓄めた幾何を（二千圓と記憶するが）、家内にやつて呉れと書いてあつた。その金が札幌に來た。家内は其の有難い涙の籠つた金、頼りない孤兒の蓄めた金をむざむざとは使はれぬ。何か世の不幸な氣の毒な人の爲に使ふ道は無いかと云ふのであつた。そこで私は「それはよい、丁度考へて居る事があつて金が無くて出来なかつたが豊平の橋の近所に小さな家が在り地面が在つて其處には日曜學校を開いている星と云ふ人がある。あの土地とあの家を買ひ、日曜のみならず毎日夜學校を開けば五十人にてても好い學校を開いては如何」と云ふと家内は「それはよからう。そう云ふ様に此の金を使へば今のみなし兒も定めし嬉ぶでせう」と云つて地面と前の古い校舎を買つた。故に私が校長と云ふものの校主とも云ふべきは私の家内である。此の家内も自分の金でなく父の世話をした人の蓄めた金である。

始めは何の名も付けずに學校を開いて居た。先生達には農學校の學生さんに頼んだ。二千圓で土地と家を買つて全部費したので先生達には何んにもお禮をしなかつた。冬にはストーブもいり夜は電燈が要る、三島、宮部氏其他の親しくして居た人々にお願ひして今日迄夜學校を維持して來た。何の名も無く前に松が生えて居た。之は今切つて無いが蠣崎さんとか思ふが來られて「先生名がないから何かつけませう、唯夜學校では他に夜學校が出来たら困るから松の木があるから松の學校としては如何」と云はれた。併しそれも變なので元を質せば米國の様な遠くから送つて來た金且家内の發意にもより、又「有朋自遠方來不亦樂乎」とあるから兩方とつて遠友夜學校とした。此の句の意味は國も名も言葉もわからぬ人、何處の人とも云はれぬ人がやつて來て會つて話して見ると何となくわかる、其の様な人は名を知らず國

を知らずとも心と心が合へば之即ち友達である。友達とは名を知るのが条件ではなく心が合へばいいのである。年齢が違つても位置が違つても、一人は高い役人でも一人は偉い學者でも金持でもそれは大した事はない。相會つて金持だとして威張らぬ、學者だとして役人だとして人を見下げぬ、何となく氣持が好い。かう云ふ人と會ふと嬉しい人間の楽しみは何と云つても氣の合ふ人に會ふことである。此の意味を孔子が「有友來於遠方……」と云つたのだ。此の言葉に擬へて遠友と云ふ。

此の學校を始めるに當り先生を頼んだ。學問の出来る人のみを頼んだのではない友達になれる一遠友になれる人、子供を可愛がる人、畢竟人と會つて明るい氣持で親切にして呉れる人を頼んだ。だから遠友夜學校に来て居た人は立身する。

萬事私に代つて代表をして下さつた人は何んと偉い人ではありませんか、近頃は専ら半澤先生が色々の事をして下さる。教育は物を覺えることよりも立派な人だとされる方が後々の成功も確かだ。現に私の家で澤山人を使つて居るが御飯炊きのばあやが居る。此の人は四十幾つで廣島の田舎に育ち百姓の家に早く嫁ぎ朝となく夕となく働き、本を讀む餘暇が無かつたので字も書けず家に來て始めて字を覺えた。新聞に手習ひして三年で手紙が書ける様になつた。然し此のばあさんは臺所に居ても暗闇の太陽の様でニコニコして何をしてても有難い有難いと云ふ、どんな物を食べても有難い有難いと云つて居る。

之は自分が作るからではなくて若し書生が文句でも云ふと「こんなものでも食べられぬ人がある有難い」と云ふから書生達も癪に障る事があつても此のばあさんの前ではだまつて居る。で若い女も「あのばあやの爲に家がどれ程よく行つてゐるかわからない」と云ふ。之は眞の人間になつて居るのである。學問とはつまり此の様な人になる事を目的とする。

四十年前に學校を開いた時は毎週三日宛來た、楽しみにして來た。其の時は人間になりきれない「アーン」と口を開いて居た「アンコ」が居た。私は第一に云つた「口を閉めろ」「先生口を閉めたら息が出來ません」「鼻でしろ」「鼻はつまつて居ます」「鼻がつまつてゐるならかめ」それで私の顔さへ見れば十人が十人鼻を動かした。どれ程學問しても口があいて居ると皆口から出て了ふ。

併しさつき教室を見て廻り大分いいなと思つた。先生の御丹精の結果之でこそよいなあと思つた。女子の生徒の手を見て歩いた。よく働き冬の中働いたひびの痕があるのを見ても、もうもつとも癒つて居る時であらうが案外思つたよりよく之は手入がよいのだなあと思つた。女は殊にそうである、手なり顔なり仕末をつけて置くものである。兎角油断すると顔だけ仕末するが手の方が大切である。今夜見て先生の丹精もあらうが銘々の丹精であらうと思つた。晝の間働き夜学ぶのであるからスタートが先づ第一に好い。長官も此の學校を調べ良成績であつたのを褒めた。

此の部屋へ來たら此處（リンカーンの寫眞）を見なさい、リンカーンは貧乏な子供の時には藁を寝臺として藁をかぶり靴もはかずに過した。學問したくも學校なくペンもインクもなかつた、或は薪を裂き白い所に小枝を取って來て焼き黒くしてはペンの代りとし手本を置いてABCを習つた。今日之行届いた教育から見れば如何してこんな事で字が覺えられるかと思ふが行届かない所に教育がある、餘りに行き届いた所には却つて教育が行届かぬ。私の米國の知人に行届いた學校の物理の先生がある「此の線と線とを合はすとピカッと光るよ」と先生が云ふと生徒は皆んなアツと口をあけて見て居る。まるで手品かなんかみたいだ。もう一人の知人は行届かぬ學校の先生で「お前硫酸を買つて來い」「硫酸は何處で賣つているでせうか」「鍛冶屋にも八百屋にもない、お前考へて買つておいで」「針金を買つておいで」「買ったことありません」「それはいいあんばいだ、太さ長さを見はからつて買つておいで」此の様に生徒に皆んなやらせる、一寸見ると前の方がいい様だが設備のよい所では口をあく、不設備の所では今云つた如く銘々でやる。「あの針金は俺が買つて來たのだ」と銘々が其の成行を見守る、遠友は殊の外設備が悪いと云ふのではない、成るべくは良くしたいがそれよりも大事なのは皆の心だ。物理なり動物の實驗をする時見るものはよく見、する事はよくする、此處に教育の本當の事がある。

長く話をして時間を取るのも如何かと思ふから本校の始めて出來た時の心持を一口に云へば犠牲と云ふべきである。孤兒が金をためたのも敢て本校の爲でなかつたかも知れないが、食べ度いものも犠牲にしてためたのだ、又家内も二千圓で三越で着物を買へば立派なものが買へ、又餘る程着物があるのではないが之は學校の爲だ

と思ひ我慢して出した。又此處においで先生も外の事で時を過せば過せるのに皆様の爲に何かお務が出来ると来て下さる。又寄附をせられる方々も額の如何を問はず使ひ道がある可金を出す世の中は美しい。自分一個の爲のみでは世の中は存在しない、人の爲と思へばこそ嬉しい、故に此の學校の關係者の心も考へ親達の意を考へ、即ち遠友の意を考へ、若い中にも學校の内でも自分の出来る事なら人の爲にする、學校を出てからも尚如何にせば世の爲人の爲になるかを考へ、何事によらず人は心の表れだから、學校の歴史、先生のなさる事又學校を助けてくれる人や學校の名に背かぬ様互に心掛け、唯に本を讀み算術をするのが學校の仕事と思はず、人格を養成し明るい氣分の人を養ふ事が目的である。

今日は始めて皆さんに會つた、何かお土産をとと思つたが待て學校へ行つて見て何か必要なものがあればそれと土産に代へようと手ぶらで來ました。先生のお話では本がいいと云はれたので若し諸君が讀むなら五十冊や百冊は餘つて居るから餘り六ヶ敷くないものを記念に送ります。充分に利用して下さい。但し讀書には注意して眼を大切にして下さい。

私も相當の年輩になつて居るが二十年たてば又來ませう。丁度其時は此處においでの方も立派になつて居るだらう。再會を楽しみにして今日は御禮を云ひます。」

○この記事は、「學問より實行—新渡戸校長のお話、5月18日御來校—」の見出しのもとに掲載された。この全文は、1981年（昭和56年）9月1日発行の単行本『遠友夜学校（さっぽろ文庫18）』p.274~278に、若干の修正を加えて転載されている。

○新渡戸は生涯、多数の著書・論文・随筆等を書き、講演・講話をしているが、まとまった形で自身が「遠友夜学校」について詳しく書いたり、話した内容が記録されたりして残っている（とくに子ども向けの）ものは他に見当たらず、大変貴重なものである。（揮毫『學問より實行』とこれがあつたからこそ、遠友夜学校を語る歴史は盛り上がり、説得力を増したといえよう）

○この記事の一節を、高倉新一郎（北海道大学教授）は、1953年（昭和28年）12月発行の機関誌寄稿「札幌遠友夜学校」の中で、「世の中は美しい。自分一個のためだけ考えたのでは世の中は存在しない。人のためを思えばこそ楽しい。だから……」

と少し手直しして紹介した。これがのちに新渡戸の至言としてしばしば引用されることになる。

○他の事柄は、次の作文の例を除いて、1931年（昭和6年）5月18日の年譜で改めて取り上げる。

## 「要約」に代えて—高井竹一の作文—

○創設者・新渡戸稲造初代校長が、1931年（昭和6年）5月18日、前回の1909年（明治42年）6月以来22年ぶりに遠友夜学校に来た。その時に語られた半澤洵代表の挨拶と、その時に書かれた谷口慎吾交友生ほか3人の在籍生徒が書いた感想文が、「始めて我等の父に見えて」の見出しで、同年11月25日発行の広報紙『遠友』（札幌遠友夜学校学期報）第9号、5ページ目に載せられた。（1ページ目に載ったのが、前掲の見出し「學問より實行」の新渡戸の講話である。北海道大学大学文書館所蔵）

○3人の生徒の作文は感動的なものばかりであるが、ここでは分量的に少ない中等部1年・高井竹一によるものを例示する。これまでに発行された単行本などに転載されたことがない初見文である。原文のままに近い全文をあげる。

○「今迄孤兒であつた私達は、今初めて、悲（慈？）父に接することが出来た。何物をも包容する、寛大な御胸の中は私達に埋まることが出来た。何といふ幸福、絶對他に許さぬ幸福。

先生が、「一番小さい人は」と言はれた時、私は自分のことの様に、嬉しさ、有難さが強く胸をうつつた。

先生の御講演の中にこの学校の遠き昔を知つて、愛の強さ、そして見えざるものへの感謝で一ぱいになつた。博愛の強さ、これは何物にても、壊すことの出来ない、神祕な、力強いものであることを知つた。如何に自分が貧しくとも、何處かに恵まれてゐる所のあることを知つて、今の境遇に善處しなければならぬと思つた。

一日、否一晚先生のお話を聞いて、先生は如何なる人にも一步も譲らない、愛の所有者であり、力の所有者であると知つた時、どこからともなく、この様な先生をいただいたこの夜学校の生徒であるとの誇がなほ一層強くなつた。

御講演を拝聴し得た人々の顔は、皆朗らかに輝いてみた。嬉し相であつた。

上級生が答辭を述べた時、急に胸が迫つて、涙がこみあげて來るのをどうすることも出来なかつた。今少し答辭がのびたら……今少し……。あゝけれども……。

たつた一晚でお別れしなければならぬ私達には、堪へられない愛着の念が満ちてみた。「出来得るならば、長くこの學校に止まつていただきたい」誰かさう思はなかつたものがあつたらう。けれ共それは出来得ない望であつた。先生は用事繁多の御身の上であると知つた時、泡の如くこの願も消え去らなければならなかつた。

先生は又來るとおつしやつた……。あと廿年、長い年月だ。たとへ又。お逢ひ出來るにしても、今の様な氣持で御迎へ出來るだらうか、「先生はきつと來て下さる」と、胸にさう叫びながらも、その後、自分の身の上は、齡は……。

このままで、この齡で、この氣持で、この學校に學びながら、再びお逢ひ出來る日の來るのを待ちたい。」

○初等部6年の小瀧勝三は「此の一夜で私は身にしみじみと或るものを味はふ事が出來た」と言い、中等部3年の山崎カツ工は「其の尊く偉大な御人格を涙で迎へ涙で送りました」と言っている。

## 「あとがき」に代えて—蝦名賢造の言葉—

○元北海道大学予科教師・蝦名賢造は1980年（昭和55年）8月発行の自著『札幌農學校—クラークとその弟子達—』p.181で、遠友夜學校の存在意義を次のように評価した。

○「新渡戸稻造夫妻の札幌に残したもっとも美しい、高貴な遺産の一粒は、このさ

さやかな札幌遠友夜学校であった。それは新渡戸を含む札幌農学校全体の教育精神そのものの体現ともいべきものであり、また逆に農学校全体にヒューマンイズムの精神を注入することにもなった。もし札幌にこの遠友夜学校の一施設がなかったならば、当時無学のままに一生を終わってしまったであろう数千人の人材を育成する機会は永久にあたえられなかったであろう。またこの夜学校があることによって、この学校の教師として学生時代の重要な時間を数百人の札幌農学校生徒、そして北海道帝国大学生が取り組み、人生と社会にたいする知識・経験をあたえられ、有用な人材として世に送り出されていった。これらの教師と子供たちを包容して、実に半世紀にわたって一貫して脈々と流れるヒューマンイズムの精神は、いかにこの地域の教育の深層に注入されたことであろうか。」

○北海道大学名誉教授・藤田正一は、2015年（平成27年）9月発行の冊子『札幌遠友夜学校』などで、遠友夜学校を「新渡戸稲造夫妻が残した美しい高貴な遺産」と形容した。蝦名の名句は藤田によって発掘され、伝えられた。

○もちろん、いまあげた蝦名の評価にしても、藤田の形容にしても、表現の多少の違いがあるが、すでに高倉新一郎らによって語り継がれてきた言葉であり、さかのぼり続けられれば、新渡戸の「遠友」にこめた精神に行きつく。突き詰めて考えれば、もっとさかのぼるともいえるであろう。（⇒1964年（昭和39年）5月10日）

○2013年（平成25年）11月3日発行の『宮部金吾と舎生たち—青年寄宿舍107年の日誌に見る北大生—』（青年寄宿舍舎友会編、北海道大学出版会発行）の日誌記事の中に次のような1文が載っている。①p.114「1911年（明治44年）3月15日、定期試験が迫るも「遠友夜学校」のために：佐藤君本日も遠友夜学校に教鞭をとりに行く。試験は近きなるに遠路通うこと<sup>かんなん</sup>のいかに艱難なるか、大いに同情に堪えぬ」、②p.116「1940年（昭和15年）11月16日、遠友夜学校の授業のために：雨。登校途中の道路は甚だしいぬかるみ。……、夜は夕食が終わるや否や、皆自室に引きこもり舎内は水を打った様な？静けさである。福本君は講義のため遠友夜学校へ」。

## 1. 夜学校創設以前（～1894）

◎1877年（明治10年）4月16日、札幌農学校の初代教頭・クラークは帰国の際、見送りの学生たちへ別れの言葉「青年（少年）よ大志を懐け（抱け）」を残した。

○1876年（明治9年）7月、クラーク博士として知られるウィリアム・スミス・クラークは、日本政府の熱心な懇願を受けて、日本で最初に開校する農学校のために、札幌農学校教頭（実質的には校長）として赴任した。アメリカのマサチューセッツ農科大学学長に就任中であった。1年間の休暇を利用して訪日するという形をとっていたので、札幌での滞在はわずか8か月とも9か月ともいわれる短期間であった。

○帰国の際、北海道札幌郡月寒村島松（旧島松駅通所、現・北広島市島松）で見送りの学生たちに馬上から述べた最後の言葉「青年よ大志を懐け」の名言（訳文は何通りもある）だった。しかし、信頼できる記録として最初に示されたのは、帰国17年後の1894年（明治27年）だった。このことがなければ、名言は遺されなかったかもしれない、とされる。

○その記録とは、札幌農学校予科生徒・安東幾三郎（のちの日伯拓植取締役）が、札幌農学校予科内学藝會雑誌『蕙林』の「雑録」欄に、記事「ウヰリアム、クラーク」を載せたものである。それは、第1期生からの聞き取り調査などに基づき、『蕙林』11号（1893年（明治26年）5月25日発行、p.32～36）、13号（1894年（明治27年）11月20日発行、p.27～36）に載ったクラークの伝記的文章であった。クラークが残した別れの言葉“Boys, be ambitious! like this old man.”を、安東は13号p.36に「小供等よ、此老人の如く大望にあれ」と訳して載せた。（『蕙林』は1892年（明治25年）5月1日、新渡戸稲造が学藝會の会頭になり創刊した雑誌で、自ら生徒を指導し、自身も多く寄稿した）

○この言葉は、その後、1898年（明治31年）に裳華房から出版された、有島武郎ら

当時の学生による学校紹介書『札幌農学校』（札幌農学校學藝會編）の巻頭で掲げられ、これが美文調の風格ある言葉であったため好評を博し、広まったとされる。

○この言葉の真意は何であったか。サンフランシスコ万国博覧会（1915年（大正4年）2月20日～12月4日、アメリカ合衆国カリフォルニア州サンフランシスコで開催）で東北帝國大學農科大學（北海道大学の前身）が作成して配付した英文冊子『東北帝國大學農科大學略史—アメリカが日本の大學に遺したもの—』には、クラークの言葉「Boys, be ambitious!」の真意として、次のように解釈され掲載されている。（2015年（平成27年）12月1日発行季刊誌『北海道大学総合博物館ボランティアニュース』（同博物館ボランティアの会発行）No.39、p.4、藤田正一著「新渡戸稲造と遠友夜学校（3）」から転載した。「青年よ大志を抱け。金銭や私利私欲や、人が名声と呼ぶようなはかないものに対してではなく、知識や正義、人々の向上のために大志を抱け。そして、人としてのあるべき究極の姿に到達できるように、青年よ大志を抱け。これがクラーク博士のメッセージである」。

○クラークの遺した、人間をつくる教育の重視という札幌農学校精神が、新渡戸稲造の人格形成に影響を及ぼし、さらにそれが札幌農学校の学生たちへ、そして遠友夜学校の生徒たちへと継承されていくのである。（記念碑文例：①ウィリアム・S・クラーク胸像「少年よ、大志を抱け」1926年（大正15年）、田嶋碩朗制作、北海道大学構内＝札幌市北区、②クラーク記念碑「青年よ、大志を懐け」1951年（昭和26年）、山内壯夫設計、旧島松駅通所付近＝北広島市島松）

○2017年（平成29年）12月発行の雑誌『しにあらいふ』20巻229号の「山陰から（59）」で、杉岡昭子（元札幌国際プラザ専務理事）は、「遠友夜学校は新渡戸稲造発と思ってきたが、やはり新渡戸もクラーク博士の精神に基づく実践者だった」と述べている。

○伝説にはつきものであるが、クラークが別離の時に見送りの生徒に述べた“Boys, ……”の言葉自体をはじめ、経緯に疑問や矛盾のある話に疑いが投げかけられて当然である。これらの疑いに対する解説は、1972年（昭和47年）6月30日発行の北海道大学附属図書館報『楡蔭』No.29が対処している。